

くまもと面白漫遊記

～武原正明広報特別委員のおすすめのこの町・この人～

No.20
上益城地区

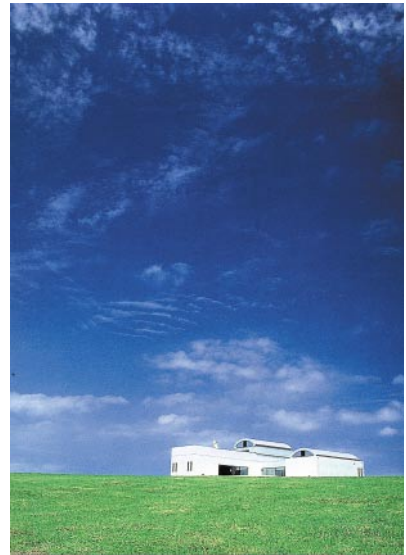
夏の誘い・農村芸能と星に出会う村

～清和文楽館・清和高原天文台～

浄瑠璃が山に啼く。
若い太夫が頼もしくみえる…。
150年前、村の農家の人々が感謝と羨望と娯楽の
思いをのせて取り組んだ農村芸能、清和文楽。
その受け継がれてきた文楽の世界が
今も観る人の心を打つ。

高原には、星に魅せられた人々が集まる。
星降る清和、満天の星空を眺められる。
スライディングルーフの天文台がある。
天文台を囲む緑も心地良さにあふれ
ここが故郷だったという思いにさえ
させてくれる。

夏は清和で高原の風を体中で浴びながら
文楽と星に出会う、二つの浪漫がいい。



清和高原天文台



清和文楽館



山里の文化、自然を観光・経済の活性化にしっかりと活かしている地域はそれ程ないだろう。人口約3500人、農林業主体の村が足元を見据えつつ“わが村にある”文化や物産を再構築したのが清和村である。

数年前、清和文楽館を設計した建築家の石井和紘氏を取材した時、何よりも地域の伝統文化との共生、それに携わる村民の皆さんの情熱が素晴らしいと言われていたのを思い出した。

上益城郡清和村は、移り変わる四季の美しさ、豊かさを訪れる人々に体感させてくれる、まるで3D劇場のようでもある。緑川の源流を辿ると緑仙峡、湖や野花が咲く井無田高原など、年に数回は必ず行くという友人たちも多く、訪れる度に、いつのまにか清和村ファンになってしまうという不思議な魅力を持っている。

ということで、KUMAKENのこの夏のおすすめは清和村に決めた。特に清和文楽館と物産館がある『道の駅清和文楽邑』と満天の星と語り合える『清和高原天文台』は、この夏、2つの全く異なった体験で汗をかいた心を静かに癒してくれるに違いない。

伝統文化と星、一見、何の接点もないような2つの体験は、実は浪漫という線につながっているのである。夏の浪漫、その見どころを紹介してくれるのは、地元の武原正明広報特別委員（(有)清和建设）。



新作「雪おんな」より



新作「雪おんな」より



佐藤さん



「傾城阿波の鳴門」より



倉岡さん

この夏、清和文楽館で人形芝居の浪漫を知ろう 清和文楽の存続を担う若手太夫に拍手！

『道の駅 清和文楽邑』には、清和文楽館と清和物産館があり、清和村の観光拠点ともいうべき存在だ。清和文楽館は1999年「優秀観光地づくり賞」を受賞、2003年には、清和文楽人形芝居保存会が第2回「くまもと観光賞」を受賞するなど、名実共に地域づくりのパイオニアとして、また、官民一体となった伝統文化の掘り起こし事業のモデルとして清和村の名は県内はもとより、全国的に知られている。

一般的に文楽、人形芝居を鑑賞する機会のない私たち九州の者にとって、清和文楽は文楽に接することができる絶好の場なのである。日本の伝統芸能の中でも人形と三味線と浄瑠璃の三位一体となって創り出す独特の世界観はまさに「情」を人形に託して演じる歌舞伎といえる。人形遣いの繊細な動き、太夫が語る浄瑠璃は日本人なら、必ず心を打たれるはずに違いない。

例えば、文楽は分らない、知らない…という初心者でも「あーい、父様（ととさま）の名は阿波の十郎兵衛…。」の名調子くらいは聞き覚えがあるだろう。あれが文楽の定番『傾城阿波の鳴門』の名場面なのである。じっくりと耳を傾け、人形の細やかな仕草に目をやると、前後の物語が分らずとも母子の深い情愛、悲劇になぜか、じわじわと引き込まれていくのである。

文楽の楽しみ方はゆっくり学ぶとして、清和文楽の話に戻そう。

清和文楽は、清和村に江戸時代末期（嘉永年間）から受け継がれている。農家の人々が阿波・淡路系の旅回りの人形浄瑠璃一座から習ったとされ、春秋のお祭りに奉納したのが始まり。神社や田畑の中に組んだ特製舞台上で上演された



「一谷嫩軍記」より



取材をする武原委員

という。まさに歴史と伝統の中で育まれた農村芸能である。明治期に一時衰退したものの、昭和29年に農家の方々を中心に「清和文楽人形芝居保存会」が結成され、11年前に清和文楽館が建設されてからは定期公演が行われるようになり、清和文楽は清和村の地域づくりの核として認知されるようになった。

清和文楽館の完成当時、KUMAKEN取材班が清和文楽人形芝居保存会の皆さんの舞台を見せて頂いた時は浄瑠璃のテープが回っていた。

太夫がいなかったのである。そこで、村は太夫を育成すべく、村の職員として文楽のルーツとして知られる淡路島の「淡路人形芝居」へ三味線、浄瑠璃の修行に村民を送ることになる。倉岡寿典さん（くらおか ひさのり・30歳 太夫名 鶴澤友寿）は2年間、淡路島で修行を積み、村へ帰ると文楽館で孤軍奮闘の日々を送った。そして、昨年、2人目の太夫が誕生した。同じく淡路島で2年間、修行を積んだ佐藤義和さん（さとう よしかず・27歳 太夫名 竹本友清）が舞台上に立っている。

村の職員でありながら、芸の道をすすむ2人。今回、KUMAKENはこの清和文楽を支える太夫2人に注目、太夫としての思い、抱負を語ってもらった。

武原委員 Q：倉岡さんが淡路島へ修行に行かれて、もう10年。

あの頃は、どんな思いで？

倉岡さん A：当時は、村のためという気負いがありましたね。

たぶん怖いもの知らずだったんですよ。(笑)

武原委員 Q：今、どんなことを感じてますか？

倉岡さん A：今、年間30～40回の公演を行っていま



すが、いつも、気が抜けない、手抜きが出来ないということです。

まずは、お客様が来ていただくこと、そして、次はそのお客様が「清和文楽は良かったよ」と誰かにすすめて頂くためにも頑張っています。

まだまだ足を運んでもらえるよう努力をしないとイケませんね。



武原委員 Q：具体的には？

倉岡さん A：今、できる外題は10。レギュラーとして5～6題をお見せしていますが、もっと外題を増やして、何度も見てもらいたいですね。

武原委員 Q：佐藤さんは、どんな経緯で太夫になられたのですか？

佐藤さん A：私は、文楽館の隣の物産館で事務をしながら、人形遣いの手伝いをしていました。村から声がかかった時は、まあ、やってみようかという軽い気持ちで淡路島へ行ったのですが、正直、淡路島のレベルの高さにビックリしました。全くの素人でしたから大変でしたが、1年過ぎた頃から、必死になりました。昨年の9月に帰ってきたばかりで、とにかく今は一生懸命頑張るだけです。



物産館

武原委員 Q：倉岡さんとしては、一人で三味線と太夫をやっていた頃に比べると、佐藤さんが太夫になって楽になったのでは？

倉岡さん A：気持ちの面では楽になりましたが、太夫と三味線、2人でやると、言葉を交わさなくてもお互いの体調がわかったりするんですよ。面白いですね。気をつかい過ぎて疲れることもあります。三味線と太夫は、つかず離れずがいいと言います。合ってるようで合っていないような…これからです。

武原委員 Q：佐藤さん、太夫として大変なのは？

佐藤さん A：表現する難しさですね。「傾城阿波の鳴門」のお鶴の声がしんどいですね。なかなか

か高い声が出ないんです。

これからの課題ですね。

武原委員 Q：これからの抱負をお願いします。

倉岡さん A：先程も言いましたが、やはり、上演作品を増やすということです。15～6回も来られているお客様が「また、これか」と言われるとつらいですね。新しい作品をじっくり稽古したい、いろ

んな作品を見たり、聞いたり、とにかく腰をすえて勉強したいんです。

佐藤さん A：作品を多く、新しい作品に挑戦していきたいですね。

文楽に徹したいと思います。

武原委員 Q：新しいものに挑戦したいということですが、新作『雪おんな』について教えてください。

倉岡さん A：以前から、もっと分りやすい、親しみやすい作品をやってみたいということで、3年前、「おじな」を文楽にした10分程度の芝居をやったのですが、その成功もあり、昨年、地方文楽としては画期的ともいえる新作文楽をつくりました。それが小泉八雲原作の『雪おんな』です。

演奏指導は大阪文楽の最高位・人形浄瑠璃文楽義太夫 八世豊竹嶋太夫氏、作曲は人形浄瑠璃文楽三味線 鶴澤清介氏です。

『雪おんな』は、よく知られていて、親子の情愛を描いた親しみやすい作品、これを機会に文楽に興味を持っていただければと思って作った清和村のオリジナルです。

ぜひ、機会があればご覧下さい。



物産館でも働く佐藤さん

倉岡さん、佐藤さん、二人共、終始、丁寧な言葉で礼儀正しく答えてくれた。決して、自慢や驕りもなく、これから芸を磨いていこうとする前向きな姿勢が爽やかさにあふれている。若い太夫の、時には武士のように吠え、時には母のようにやさしく語る、その舞台をこの夏、ぜひ、見てほしい。

文楽が日本人の心を映し出す歴史の浪漫としたら、太夫2人の仕事こそ、浪漫いっぱいの仕事、清和村の未来をになう仕事である。

星の浪漫に出会う清和高原天文台 —星空とアウトドア、そして、あの絵本—

満天の星を眺めながら、大宇宙への思いをめぐらせるのも夏の楽しみの一つ。しかも、そこが涼しい高原で、宿泊できる場所とくれば文句のつけようがない。そんな場所が清和高原天文台である。

標高700mの高原に建つ清和高原天文台は、10年前にオープン。

口径50cmニュートン式反射望遠鏡が設置され、年に1万2千人もの天文ファンが星の観測を楽しむ、星降る村・清和自慢の天文台である。

この天文台の特徴は、天文台の象徴とも言うべきドームがないことである。

スライディングルーフといって、屋根全体を移動でき、満点の星を眺められるようになっている。

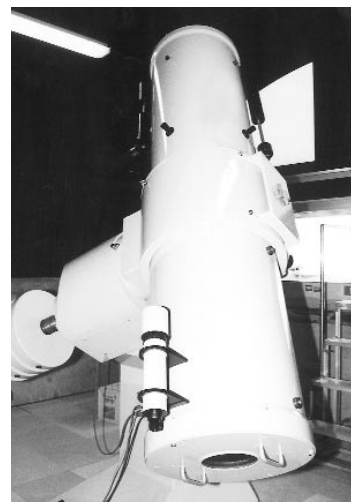
私たちを案内してくれた清和高原天文台の石原 誉晃さんは「せっかく、見晴らしの良い場所にあるのですから、もっと星を楽しもうということ…。」と説明してくれた。なるほど、天文台からの見晴らしは抜群。

清和高原天文台のもう一つの魅力は、天文台が管理するキャビン。木の香りがただようキャビンは緑の草原の中に全10棟が建っている。調理器具など設備も充実していて、宿泊しての天体観測にはもってこいだ。さらに併設の「レストラン 星座の森」の雰囲気がよく、緑の草原を眺めながらバーベキューが楽しめる。

そして、最近、話題になったこの絵本



石原さん



口径50cmニュートン式反射望遠鏡



清和高原天文台

をぜひ、紹介したい。清和高原天文台が出した創作絵本『コンタと星じいちゃんの天文台』。作・絵は池永久美子さん。キツネのコンタが仲間と協力して大好きな星じいちゃんのために天文台を作る話だ。星じいちゃんのモデルは、清和高原天文台名誉台長・宮本幸男さんである。おそらく、清和村と宮本さんの出会いから天文台ができるまでを物語にされたと思うが、星を愛してやまない宮本さんの情熱と愛すべき人柄が星じいちゃんのキャラクターと重なって、なんともすがすがしい。清和高原天文台には、楽しみがいくつも待っているような気がする…。



ビデオプロジェクター室



創作絵本『コンタと星じいちゃんの天文台』

この夏、ぜひ清和村へ

武原委員・取材を終えて

地元の取材は、改めて、その良さを知るいい機会です。村の人々は顔見知りが多く、照れくさいと思いつつも話を聞くと、また新しい発見がある。

清和村は小さな村ですが、ここだけしかない、清和村ならではの鼓動が聞こえて来るような気がします。それは、清和に住む人が住んでいて感じる良さ。

清和のPRというのではなく「来てもらえれば分る！」というものです。

この夏、いろんな浪漫を感じながら、清和でひと休みしてください。

【清和文楽館】

- 開館時間 午前9時～午後4時30分
- 休館日 毎週月曜日（祝祭日の場合は開館）
- 入館料 高校生以上 420円 小中学生 210円
- 定期公演 第2・第4日曜日 午後1時30分開演
- 予約公演 20人以上の団体様のみ、希望の日に公演。※但し、2週間前に予約
- 公演鑑賞料 高校生以上 1260円 中学生840円
(入館料込) 小学生 630円

■お申し込み・お問い合わせ

TEL 0967-82-3001

FAX 0967-82-3002

■清和高原天文台 イベント情報

8月 2日（土）九州スターフェスタ

9月11日（木）お月見会

問い合わせ TEL 0967-82-3300

ホームページ

<http://www.vill.seiwa.kumamoto.jp/seiwaobs/index.htm>



レストラン 星座の森



アウトドアーズキャビン

文楽写真提供：清和文楽館